

「女教師」の誕生

—近代日本における女の文化と生活史—

阿久津昌三

1 伝統的「教養」の世界と近代的「学校」の世界

小野はなは、明治5(1872)年(戸籍上では明治6年)に東京日本橋高砂町に生まれた。父方の祖父は、館林藩の浪人の子であったが、はなの父、清兵衛は両親がともに熱病で死んだので、鹿沼の小野家に養子にもらわれて育てられた。はなの母は岡山の蒔田藩の士族の家に生まれた。はなの母が清兵衛に嫁いだのは明治初め頃で、清兵衛が生糸の職業をやめて兜町で株式の商売をしていた時である。明治13(1880)年、はなが、7歳の時に、清兵衛が東京府病院で亡くなっている。父の死で家計が苦しくなり、日本橋の家を売却して、水天宮に引越し、後に、神田錦町、本所若宮町と貸家を転々としている。はなの母は、蒔田藩の人の紹介で神田に近い印刷局に勤めていたが、弟の福太郎(明治10年生まれ)の育児のために、印刷局をやめて、その時に購入した手ミシンで内職を始めた。内職の仕事の内容はコウモリ傘の布地の縫合、足駄の爪掛け、ランプのホヤ貼りなどであったという。当時の東京では子どもたちに内職をやらせる風があつて、はなも11歳ぐらいから本所若宮町の間屋の下請けの家で元結のねがけをつくる内職をやっている。福太郎も9歳か10歳の時に本所の小間物屋に丁稚奉公に入っている。小野はなは6歳の6月6日に日本橋の相賀学校という私立学校に入学している。

「日本橋には久松、常磐などの学校がありましたが、母や祖母がその学校を見ると、女の子が校庭で立ってまりをついている。それを見て驚いて、こんなおてんばな学校に娘を入れることはできないというので、相賀学校に入学させられました。その頃までは女の子は坐ってまりをついたもので、立ってまりをつくことはないことでありました。ここの生徒は町家の裕福な子が多かったので、女の子の通学には大抵小僧か女中のお伴がついていました。」

東京府は明治5年の「学制」実施にあたって他府県とは異なった政策をとっていた。公立の小学校は政府の要請もあり全国のモデルとなるような高い水準の学校とすべきであるという認識があった。しかし、実際には、質の高い公立小学校の設置は経済的条件が整っていなかったために「於当府管下ハ外府県ト違ヒ私学家塾開業ノ者、学舎大凡千五百ヶ所余モ有之候」(「明治6年3月本府決議」『東京府史料』学校 一)というように、手習塾、私塾から転換した私立小学校が育成され活用された(『東京都教育史通史編一』1994年)。

小野はなの私立小学校の選択には、父方の「没落士族」、母方の「士族」出身という「家」意識が働いている。私立小学校の施設の貧弱さ、手習いを中心とした旧態依然の教育内容については、小野はなの生活史の語りのなかにも読みとることができる。

「学校では一日に草紙十冊以上も手習いをしました。もっとも男の子などには碌に手習いせぬ者もいましたが、時々『お改め』と言って先生の検分があり、生徒を叱りました。校主の相賀先生の御新造さんは後妻でしたが、高等師範出の人で、私は何でもよくこの人に相談しました。御新造さんは後に幼稚園をつくりまして、これが模範的な幼稚園と言われるほどになりました。学校の先生は相賀先生夫妻の外三人ほどいまして、習字、読本、算術だけを教えていきましたが、その算術は珠算だけで、これの加減乗除をやりました。読本は始めから神人天地という風なもの暗記でした。習字の外は石板石筆を使い、鉛筆は使いませんでした。久松、有馬などの学校には

運動場があって、縄とび、まり突きをしていましたが、相賀学校には運動場はありませんでしたし、私が卒業する時にもまだ坐って授業をしておりました。生徒たちは自分の机と硯とを学校に持って行っていましたから、新生は机と一緒に入ってきたわけですが、この時には必ず煎餅などのみやげを持ってきますので、それを皆に配ってたべました。」

陣内靖彦は、近代日本の教員類型を「師匠的」教員、「士族的」教員、「師範型」教員などに分類しているが⁽¹⁾、小野はなが学んだ相賀学校の教員は、高等師範出身の「御新造さん」を除けば、「師匠」が「教員」に名を変えただけの伝統的な教師像が浮き彫りになってくる。しかしながら、相賀学校に典型的にみられる教師像は、明治 20 年代の後半、特に、日清戦争以後、日本の近代化のなかで、政治活動から隔離・統制され、「教員固有」の役割カテゴリーをもって誕生する。

2 女性が教師になること/男性が教師になること

小野はなは、小さい時から母のいろいろな内職の手伝いをやっていたが、4 歳の時から母や祖母に三味線や踊りを習っている。はなが 6 歳で相賀学校に入学して上級 8 級まで上がって学校を出たのは 14 歳の時である。家事の手伝いが忙しくて学校に行けなかったためでもある。月琴が流行した時には⁽²⁾、それも習って、15 歳から月琴を教えに出稽古をして家計を助けたという。小野はなは、幼少時代の三味線、月琴の稽古事が幸いしてか、東京音楽学校に入学して音楽の教師をめざすことになる。

「明治 21、22 年ごろ音楽の教員が少なくて、その月給が良いということを友人から聞きまして、上野の音楽学校に入ったのです。しかし本科には入れず、専科に入り、オルガンと歌とを習いました。私は小山作之助という人に習い、学校へ出て行く時間は殆ど勝手でしたが、毎日通学しました。当時専科の学生は音楽を職業とする目的の人であったと思いますが、地方からきた別の学生が多うございました。しかし、私の知っていた人は大抵やがて上野の本科の方に入りました。私の学科の方は音楽理論と教育学でありました⁽³⁾。」

明治期において女性が教師になることは、男性が教師になることとは本質的な差異がある。小野はなが「学制」発布の明治 5 年に生まれて、教師として「女の一生」を生きたことを考えれば、はなの生活史は、近代日本における「女教師」の誕生とも読みとることができる。小野はなは、明治 23(1890)年、19 歳の時に、2 年という任期契約で音楽の教師として福島県の白河の小学校に赴任している。この年には、小学校の男性教師が 63,977 人であったのに対して、女性教師は 3,753 人(私立 78 人)であり、女性教師の比率は 5.5%を占めていた⁽⁴⁾。これは女性教師の比率が高いという時期ではない。

ところで近代日本における最初の「女教師」はどんな人物であったのだろうか。木戸若雄の『婦人教師の百年』(明治図書、1968 年)によれば、江戸末期に庶民の教育機関として活躍していた寺子屋の女師匠たち一茨城県の黒沢登幾、長野県の河内山寅、名古屋の棚階絢子があげられるという。これらの女師匠たちは「師匠的」教員であった。明治政府は、「富国強兵」「殖産興業」をスローガンとする近代化政策のもとで、新しいタイプの教師の誕生を促進させることが必要になった。これが文部省の師範学校設置として具体化してくる。文部省編『学制九十年年史』(1964 年)には、次のように記述されている。

「文部省は、『学制』発布に先だつ明治 5 年 5 月、東京に師範学校を設立したのであって、これを中心として全国の教員養成機関を整備しようとした。この師範学校は、当時、アメリカ師範教育の経験をもっていたスコットを教官として招き、全国から選択した生徒を入学させて新しい教

授法の実施にあたった。スコットは、アメリカから教科書、教具をとり寄せて、学級による授業の方法を始めた。この学級教授法は、寺子屋、塾等の個人教授の方法を改めて一せいで授業の方法とする出発点となった。この師範学校設立により、わが国の師範教育はその発展の緒につき、卒業生は各府県に設けられた師範学校や伝習所等の教員養成機関に配置されて、小学校教員の養成と指導にあたったのである。明治6年8月には、官立師範学校が大阪、宮城に設置され、同7年2月には、愛知、広島、長崎、新潟にも設置された。また女子教員養成のために、同年3月東京女子師範学校の創立をみた。」

「人民ヲシテ漸次開明ノ域に臻ラシメント欲スル、女子師範学校ヲ設クルヲ以テ一大要務トス。蓋シ女子ノ性質婉静奮ニ能ク其ノ教科ヲ講ズルヲ得ルノミナラズ向來幼稚ヲ撫養スルノ任アレバナリ。」

これは、文部省輔田中不二磨が太政官宛の建白書のなかで女子師範学校設置の必要を説いたものであるが、これが近代日本における「女教師」の誕生のひとつの契機となった⁽⁵⁾。小野はなの生活史のなかから白河の教員生活をみてみよう。

「白河に赴任する時には皆に反対されましたが、東京では月給が5、6円であるのに、福島県では12円だということで、出かける決心をしたのです。その頃師範出で福島県では月給7円でしたが、唱歌の専任は12円だということでした。しかし赴任してまもなく月給は8円に減らされました。12円の時は日給だったのです。つまり私は白河に行つて間もなく福島県の音楽教員免許状をとり、正教員になって月給をとることになりました。」

「学制」発布以来市町村立小学校教員の給与は、設置者たる市町村が負担するという原則に貫かれてきたが、明治13(1880)年の改正教育令以後、小学校教員の俸給は府県知事が定めて文部大臣の許可を得ることとされていたが、実際の支払は市町村の裁量にまかされていた。また、教員の資格取得は、師範学校卒業(証書)と府知事県令が授与する教員免許状があり、その実施の具体策は「師範学校教則大綱」(明治14年)と「小学校教員免許状授与方心得」(同年)、その種類、名称、有効期限などが規定されていた⁽⁶⁾。

小野はなは、白河に赴任して30日目に母を呼びよせている。また、「白河ではうちでも音楽を教えていましたから、月20銭の糸代という謝礼を教え子1名からうけていました。月琴、清楽を教えていたのです。……駅の人や裁判官の奥さん、娘さんが習いにきました」と語っているように、当時の教員は給与以外の所得もあった。その当時の物価についても「米1升が6銭」「家賃も10畳の座敷に玄関付きの家が月50銭(後に、松平楽翁公の茶室であった家に引っ越す)」と語っているから、地方での教員生活はかなり余裕があるものでもあった。また、小野はなは、食生活、音楽の授業、運動会などについても詳細に語っているが、ここでは、女性教師の服装についての語りをとりあげてみよう。

「白河の学校の運動会といいますと学校から1里も2里も離れた広い原っぱでやりました。すべて紅白にわかれてかけっこをしたり綱引きをしたりしていました。女の先生などもまだ袴をはかぬ時であったので、普通の帯をしめたままでかけ出したりしました。女の先生として袴をはいて通学するようになったのは、明治31年で、これは平の学校につとめるようになってからのことでした。白河にいた頃東京方面の女学生などが袴をはいているのを見ましたので、私はメリンスを買ってきて自分で袴を作りましたが、白河の学校では女が袴をはくということに異論があつてついにははきませんでした。靴ももらったのを一度はいて学校に行ったことがありましたが、これもやめた方が良く注意されてすぐにやめました。」

ここには、着物を着て袴をはき編上げ靴やリボン飾りがついた靴をはいていたという女学生の

袴姿は女性教師の服装にはない。小野はなの生活史の語りはこの時期の「袴」をめぐる言説と密接に関わっているのである。明治初期に、一部の女性のあいだに「両脚が分かれている男性用袴」の着用が流行した。それは男女同権の意思表示をしたものであった。しかし、明治10年代に抑圧されて、女学生の服装は「着流しお太鼓帯」という旧来のスタイルが一般的となつたが、明治31年頃から、女袴(「両脚が分かれていないスカート状の袴」)が全国的に用いられるようになる。女袴のスタイルが、小学生から教師まで、学校における女性の服装として普及するのである。これは、東京帝国大学名誉教師のE・ベルツの講演「女子の体育」の影響によるものである。ここには、従来の子学制の服装を見直すことで、「女性の身体化」「女性の国民化」を図ることで、日本の女子学生を「強健活発なる母」に育て「健康なる小児」を産ませようとする「良妻賢母」思想のイデオロギーが機能しているのである⁽⁷⁾。

小学校の遠足や運動会が、軍事教練の形式をとっていたことからすれば、それは「男性の身体化」「男性の国民化」を図ることと対極にある。もっとも運動会では、女子の児童・生徒は看護・救援活動がとりいれられていたことからすれば、それも「女性の身体化」「女性の国民化」の現象であると解釈することができる。近代国民国家をめざす明治政府が教育に対して準備した論理は「立身出世」であり、この論理の外にいた女性たちに「良妻賢母」の論理が提供されたのである⁽⁸⁾。

深谷昌志によれば「良妻賢母」思想の端緒は明治28(1895)年にさかのぼるといふ。日清戦争の経験によるナショナリズムの高揚を契機として、明治28年から30年代にかけて、「女学振興」の必要性が政界や教育界で論議されるようになり、そこで良妻賢母思想とそれに基づく教育政策が生まれた⁽⁹⁾。深谷によれば、「良妻賢母」とは「ナショナリズムの台頭を背景に、儒教的なものを土台としながら、民衆の女性像からの規制を受けつつ、西欧の女性像を屈折して吸収した複合思想」であり『国体観念』に代表される体制イデオロギーの女子教育版であり、家族制度の『醇風美俗』、中等教育の『質実剛健』などと並んで、国体観念の重要な側面をになう概念である⁽¹⁰⁾。その具体的な教育政策として、明治32(1899)年2月に高等女学校令は、「良妻賢母」思想の具体的な教育政策の表現でもあった。牟田和恵は「新しい女」に象徴される女性をめぐる、女性の手になる新しい表現や思潮、風俗が発生し展開したことと「良妻賢母」思想やそれに基づく教育体制との関係について「良妻賢母とは、たしかに一方では、女性をよき母・妻という性役割に閉じこめる抑圧的な機能を果たしたのであるが、しかし他方では妻・母としての女性の地位を高めるものでもあった」⁽¹¹⁾と述べている。明治20年頃から総合誌・評論誌で「家庭」「ホーム」という用語をもちいて家庭の団欒、夫婦や親子関係の間での愛情を強調して「家庭」を理想の場として高く評価する言説が登場してくる。また、婦人を対象とする「家庭」を主題とした雑誌が発刊されてくるのもこの時期である⁽¹²⁾。

3 伝統的教養と近代的学問の世界—「女子のたしなみ」と「モダン・ハイカラ」

小野はなは、結婚後、白河、平、横浜、神戸と各地で教員生活を続けることになった。はなは、それらの学校文化と生活史を次のように語っている。

「白河では自宅でも月琴などを教えていました。そしてそこへ私の主人の妹も習いにまいりました。主人は加納と申しまして、平の出身ですが、福島師範を卒業して、当時私と同じ白河の学校に務めておりました。妹がうちに来ていたことから特に親しくなりました。私は主人が高等師範に入学したら結婚しようと言っていました。けれども在学中に急性肺炎を患いまして退学しました。そんなことで主人との縁談にごたごたがありました。私が23、24歳の時に結婚しまし

た。その後、高等商業の教員養成所に入りそこを卒業して、神戸高等商業学校に勤めるようになりましたので、私の教員としての任地も白河から、平、つぎに横浜吉田小学校、それから神戸の湊川小学校、さらに同じ神戸の生田川小学校とかわりました。」

小野はなは、夫が高等師範学校在学中に退学したのを機に、破談になりそうだった結婚もまともに、明治 29(1896)年に白河から平に移っている。住居、野菜、服装、風俗、学校などをとりあげて白河と平とを比較しながら「町」の民俗について述懐している。平の授業風景は次のようなものであった。

「学校は小学校、中学校が一つずつありましたが、女学校はありませんでした。女子の方は小学校の補習科で間に合わせていたのだと思います。この補習科は裁縫が主で、この外に本科の方でお茶、作法、音楽などを教えていました。この頃補習科の先生は藩に仕えたことのある老女でありまして、この人は一般の家庭での裁縫と同じ裁縫を教えていたと思います。その後、後藤という人が東京の新しい裁縫を教えたのですが、これはあまり評判が良くありませんでした。」

ここには、この当時の地方の小学校が、裁縫、お茶、作法、音楽などの「主婦となる」ための準備機関として機能していたことが読みとれる。近代日本における中・上層の女子にとって必要とされる「たしなみ」と呼ばれる教養の世界—和歌、習字、手芸、琴、生け花、茶の湯などの伝統的な技芸に属する領域—と対比すれば、女性の性役割としての女子の「つとめ」—母から娘に伝授された日常の実用的な世界—がこの当時の地方の小学校で教えられていた。この意味では、「たしなみ」としての教養の世界、「モダン」で「ハイカラ」といった高等女学校の世界とは次元を異にした中・上層の女子の「つとめ」という日常の実用的な世界が平の小学校の授業風景から読みとることができる⁽¹³⁾。

小野はなは、明治 33(1900)年、夫が大倉高商に入学したのを機に、芝の琴平町に移り住んだ。翌年、神戸高等商業学校の創設とともに、はなの夫は商業算術の教員として神戸に赴任する。はなは、神戸高商の同僚の家族たち—モダンでハイカラな人びと—とのつきあい—盆暮れの贈答、洋食、フランス料理、スキ焼き、松茸狩りなど—を詳細に語っている。小野はなは、神戸の湊川小学校、生田川小学校に勤務することになるが、伝統的教養を超えた高等女学校に学ぶ女学生が誕生しつつある時期でもある。

「神戸に赴任しました頃、私はもう先生をする気持もなかつたのですが、せっかく音楽の先生ができるのだからということで、湊川小学校に務めることになりました。けれども雲中の家からは遠いので、朝の通勤だけは毎朝人力車で通いました。そしてもう一つの学校もかけもちをしましたので、その方の給料を人力車代に当てておりました。片道 16 銭で毎朝明治ぐるまの曳子がやって来てくれました。そしてやがて家に近い生田川小学校に転勤できました。湊川小学校は女生徒のみの学校で、これに対し楠校の方は男生徒だけのところでした。また生田川も女生徒だけの学校でした。だから当時の神戸では男女別に小学校ができていたものと思います。湊川の生徒は和服に袴をはいていました。唯一住友のお嬢さんだけが洋服を着て人力車で通学していました。私どもが赴任した頃の神戸では女の子は袂のある着物をきていたのですが、日露戦争中に校長から女の先生は筒袖にしてくれと言われまして、皆この時に筒袖にしました。それから筒袖が多くなりましたけれども、湊川小学校には近くの福原遊廓の子供がたくさん入学してしまっていて、これらの子は家に帰るとぜいたくな振袖を着ておりました。当時女の先生はカシミヤの無地の袴をはき、生徒はメリンスのものをはいていました。もっとも先生のも普通の袴はメリンスでした。また当時の男の先生の方は背広をきていました。……神戸には自転車が多くありました。と言っても商店の店員で自転車に乗るものはなく、学校の先生などが通勤に使うぐらいのものでし

た。」

明治40(1907)年に、はなの夫は神戸高商をやめて尼崎の尼崎醤油株式会社に勤務する。しかし、明治44年にはこの醤油会社が倒産して、海上火災に転身している。この転身で東京に勤務することになり、小野はなは東京の砂町、次いで小石川久堅町の借家に移り住んでいる。小野はなが、いつまで女性の教員として働いたのかはわからないが、東京の家では白河、平から呼んだ「女中」が働いている⁽¹⁴⁾。

「大正2年に津波があつて、東京の大根の値段が一度に3倍にあがつて驚いたことがあります。またその頃1円50銭の女中の給金が、3円50銭ぐらいに上りました。女中は主人の郷里の平から来ていましたが、白河からきたものもありました。白河の女中には一年の給料を先払いするという風でした。」

(追記)

有末賢・倉石忠彦・内田忠賢・小林忠雄編『都市民俗生活誌』(明石書店、近刊)の第2巻「都市の活力」、第2章「商業と繁華街」の「解説」の編集作業のなかで、桜田勝徳「明治回顧 小野はなさんの懐旧談」(『民間伝承』第29巻第1号～第4号、1965年)に偶然に出会うことになった。桜田勝徳は、昭和27年11月から翌年の2月にかけて、巢鴨の小川邸を訪ねて、当時81歳の小野はなさんから聞き取った筆記による談話記録をもとに『民間伝承』に発表した。本稿は、「明治回顧 小野はなさんの懐旧談」をもとに、「女教師の誕生」という主題で、小野はなさんの生活史を通して、近代日本における女の文化と生活史—特に「女教師」の生活史—を描きなおしたものである。

なお、本稿を執筆するにあたり、信州大学教育学部の小林輝行教授、山口恒夫教授から、明治・大正期の教育史関係資料に関するご助言をいただいた。記して感謝の辞を表したい。

-
- (1) 陣内靖彦『日本の教員社会—歴史社会学の視野』東洋館出版社、1988年、pp.111-116。また、深谷昌志・深谷和子『女教師問題の研究—職業志向と家庭志向』黎明書房、1971年を参照されたい。
- (2) 藤崎信子「月琴」平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修『日本音楽大事典』平凡社、1989年、p.296。
- (3) 明治18(1885)年7月、音楽取調掛は全科卒業生として幸田延、遠山甲子、市川道の3名を送り出した。また、明治22年1月に制定された東京音楽学校規則には同校の目的は「音楽家および音楽教師の養成にあること」を謳っているが、東京音楽学校が上野公園元西四軒寺跡(現在地)の新校舎に移転するのは明治23年のことである(『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第1巻』、1990年、p.285,287,290)。
- (4) 一番ヶ瀬康子・木川達爾・宮田丈夫編『女教師の婦人問題』第一法規、1974年、p.189。また、深谷昌志・深谷和子『女教師問題の研究—職業志向と家庭志向』黎明書房、1971年を参照されたい。
- (5) 唐澤富太郎『教師の歴史』創文社、1955年、pp.105-138、小林輝行『近代日本の家庭と教育』杉山書店、1982年。
- (6) 陣内靖彦、pp.92-93,102-103。
- (7) 岡本洋之「学校をめぐるファッションの文化」石附実編『近代日本の学校文化誌』思文閣出版、1992年、p.202。また、明治・大正期の女子学生の服装については、安東由則「近代日本における身体の『政治学』のために—明治・大正期の女子中等学校の服装を手がかりとして」(『教育社会学研究』第60集、1997年)を参照されたい。

(8) 奥武則『『国民国家』の中の女性—明治期を中心に』奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考 V 関ぎ合う男と女—近代』藤原書店、1995年。また、運動会については、吉見俊哉・白幡洋三郎ほか『運動会と日本近代』(青弓社、1999年)を参照されたい。また、三浦雅士『身体の零度—何が近代を成立させたか』講談社、1994年。

(9) 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、1990(年初版1965年)、pp.139-140、牟田和恵『良妻賢母』思想の表裏—近代日本の家庭文化とフェミニズム』青木保・川本三郎ほか責任編集『女の文化』岩波書店、2000年、pp.25-26。

(10) 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、p.11。「良妻賢母」思想について近代日本に特有の家族国家観に結びつけて『国体観念』に代表される体制イデオロギーの女子教育版』であるとす深谷論については小山静子の批判もある。小山は「良妻」とつねに対になって使われる「賢母」は『家庭教育』が公教育の補完物として要請されたときに、登場してきたものである』としている(小山静子「家庭教育の登場—公教育における『母』の発見」『規範としての文化—文化統合の近代史』平凡社、1990年)。また、大正・昭和前期の「良妻賢母」思想については、秋枝蕭子『良妻賢母主義教育』の逸脱と回収(奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考 V 関ぎ合う男と女—近代』藤原書店、1995年)を参照されたい。

(11) 牟田和恵『良妻賢母』思想の表裏、p.34。

(12) 牟田和恵『戦略としての家族—近代日本の国民国家形成と女性』新曜社、1996年。

(13) 近代日本に登場した新しい集団としての女学生については、吉田文「高等女学校と女子学生—西欧モダンと近代日本」(青木保・川本三郎ほか責任編集『女の文化』岩波書店、2000年)を参照されたい。当時のメディアの女子学生像を通して、その集団の髪形や服装、近代スポーツに興じる姿や西欧音楽を楽しむ姿に「モダン」「ハイカラ」の象徴を読みとっている。

(14) 小野はなは「職業婦人」について次のように述懐している。

「私が教員になりました頃には女の職業というと教員か産婆でありまして、きりょうの良い人はこのような職業婦人にはなりません。白衣の看護婦もまだ目につかない頃でした。もともと白河に赴任した時にはすでに福島県的女子師範では第3回目の卒業生を出していました。それに長野県は婦人の職業進出という点でその頃から進んでいたように思います。当時福島師範の音楽の先生は長野県の婦人でした。」

「職業婦人」の誕生については、清水美知子『『女中』イメージの変遷』、木村涼子「女学生と女工」(青木保・川本三郎ほか責任編集『女の文化』岩波書店、2000年)、濱名篤「階層としての女中」(青木保・川本三郎ほか責任編集『都市文化』岩波書店、1999年)、奥田暁子「女中の歴史」、亀山美知子「看護婦の誕生」(奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考 V 関ぎ合う男と女—近代』藤原書店、1995年)を参照されたい。

(2002年5月21日 受理)